

ため、怒った死神に、無数のろうそくに人の命の灯がともる洞窟に連れていかれ、病人に寿命を譲ったために短くなつて消えそうになつている自分のろうそくを見せられる。男は、寿命をのぼすために、自分のろうそくに新しいろうそくを一つごととするが失敗して死ぬ。

以上が、金馬の口演速記のあらすじであり、(今村)(今村二)(富田)(三二)(名人)もほぼ同じ。(落協)(飯島)では、「名づけ親」の語は全く出てこないが、(飯島)に収録されている飯島氏との対談の中で、六代目三遊亭円生が「死神は男の名づけ親なんです」と語り、二代目三遊亭金馬が演じていた古い形では、先に紹介した形であつたと述べている。「名付け親」(ドイツ語では“Gevatter”)の習慣が一般的であつたのは、ヨーロッパの話であり、例えば、チャイコフスキー作曲のバレエ「くるみ割り人形」(原作はホフマンの創作童話)の重要な登場人物であるドロツセルマイヤーは、主人公クララ(原作ではマリー)の「名づけ親」である(「代父」とか「洗礼立会い人」と訳されることもある)。一方、日本では、昔から、親以外では、主に、祖父が名づけ親になつて来たようであり、「名づけ親」という語は、あまり使われない。したがって、金馬の速記を見ても、「そのむ

かしは子どもができませんと、名づけ親というものをこしらえたもので」と、わざわざ、冒頭で解説している。が、後の時代に受け継がれなかったことを見ると、結局、日本の聴衆は、この言葉になじまなかつたのかも知れない。「死神」という言葉も、明治・大正時代にどれだけ一般的だったかは疑わしく、後述の大木篤夫作「蠟燭をつぐ話」では「死神」ではなく「死」と呼んでいるが、落語のタイトルは、現在では、定着している(註二)。

(落協)では、主人公の男は、いったん、ろうそくの灯を移すことに成功するが、ほっとしたはずみで、灯を吹き消してしまう(これは、比較的新しい型のようだ)。(明落)には、三遊亭円遊(初代)が演じたものが記されており(タイトルは「全快」)、ここでは、男は、自分の灯だけでなく、病人の灯も、新しいろうそくについて帰って来るといふ結末で、それで、病人が「全快」する(この型には「ほまれのたいこもち」という題がつくこともあり、円遊が改作したものらしい(保田)(山本))。

このように、ヴァリエーションは多々あるが、基本パターンは、グリムと同じである。相違点の第一は、死神の位置についての設定、つまり、頭と足元の関係が、グリムと落語で